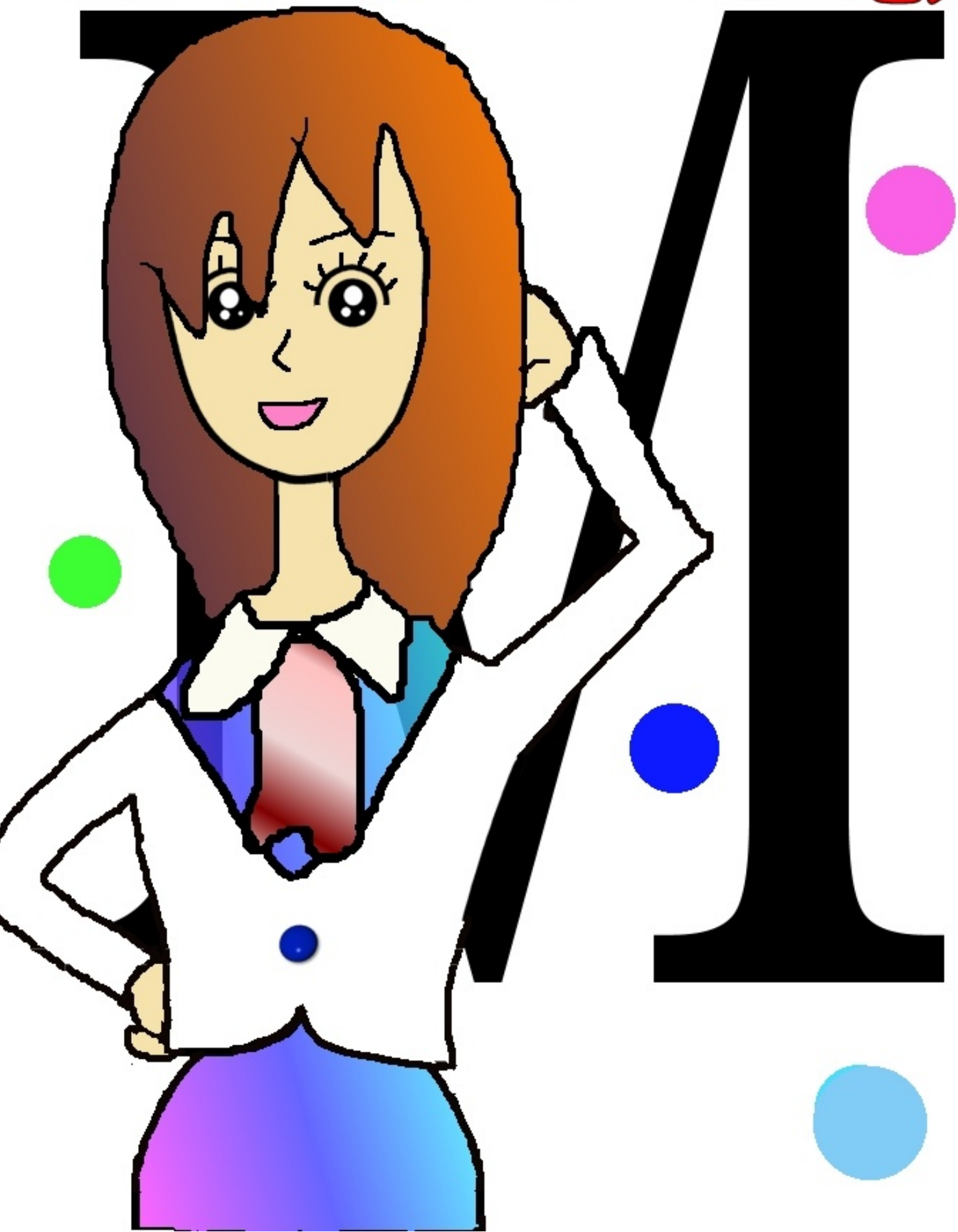
村上ハルヒの憂鬱



それは、天使のような美しさだった。静まりかえった教室。軽やかな足取りで、彼女は歩み寄ってきた。
避けようとする試みは無意味。彼女の視線が、見る者の心を射止める天使の矢なら、逃れられる理由はない。俺は金縛りにあったよう、近づいてくる彼女を見つめていた。
教室中の視線を受けつつ、彼女は俺の前に立った。そして、鈴の音とも思われるほどの、澄んだ声で、
「あんた、宇宙人？」
はい？
停止する思考。
入学式が終わり、新入生は各クラスに集まって初めてのホームルームが始まるのを待っていた。その中でひときわ目を引くのが、今俺の目の前に立っている少女。端正な目鼻立ちに、艶やかな黒髪。透き通るほど白い素肌に、細い肢体。
彼女の美しさが群を抜いていたためか、入学式が行われていた講堂にいたときから、彼女には男子生徒の視線が集まっていた。それも入学試験の成績が一位だった生徒が担うという、新入生代表の挨拶を行っていたのだからなおさらだ。
「ねえ、聞いてるの？」
顔をのぞき込んでくる少女。彼女の大きな澄んだ瞳が、俺の視線を捉える。今まで目にしたことがないほどの美人を前にして、ただでさえ頭が真っ白だというのに、彼女は俺の耳に口を近づけ、凛とした声で、
「やっぱり宇宙人なの？」
言って、不思議そうな顔をする少女。
その質問にいかなる意味が込められているか、理解できない。ただ俺は、首を横に振った。
「ほんとに？」
両腕を組み、いぶかしそうな顔をする少女。
頷く俺。
「ふーん。違うんだ」
残念そうな顔をする。
そりゃ違うさ。そもそもなぜ初対面で宇宙人であることを疑われなければならないんだ？
「そりゃ失礼したわね」
踵を返す少女。
俺はなぜ宇宙人であると思ったのか訊こうと、彼女を呼び止めようとした。
「ちょっと待っ―」
だがそのとき、教室の前のドアが開き、担任が入ってきた。立ち上がっていた生徒たちはいそいそと自分の席に着席する。俺は窓側の一番前の席からその様子を眺めていた。――と、例の少女は俺の隣の席に座った。
教壇に上った担任は自己紹介をした後、生徒に順に自己紹介をするように言った。廊下側の一番前に座っていた生徒が当てられる。
名前や趣味、出身校など、平凡な自己紹介が続いていく。汗田大学の附属校という世間に名だたる高校であるせいか、耳にしたことのある中学校の名前も少なくなかった。三十人ほどが紹介を終えたところで、やがて俺の隣の生徒が立ち上がった。
教室中の生徒が見守る中、ぴんと背筋を伸ばした少女は、まっすぐと前を見据え、凛とした声で言った。
「一柳女学館中学出身、村上ハルヒ」
入学式で新入生代表の挨拶を読んだときから思っていたが、変わった名前だ。だが変わっていたのは名前だけではないと、次の台詞を聞いて思わされた。

「ただの人間に興味はありません。このなかに宇宙人、神等がいたら私のところに来なさい。以上」
　彼女は表情ひとつ変えず、一点の曇りもない澄んだ瞳で、教室中の視線を受け止めていた。そして、それがどこの国の礼儀か知らないが、スカートを軽くつまんで会釈すると、何事もなかったかのように着席した。
　なるほど。こいつは宇宙人や神やらを探しているらしく、さっきの質問はその一貫だったらしい。だが「神等」の「等」って何だ？　宇宙人や神以外でも受けつけるのかい？
　しんと静まりかえった教室。一陣の沈黙の後、担任はふと我に返ったかのように、
「え、ええと、次の人…」
　そのまま自己紹介が続き、俺の番がやってきた。一番最後ということもあり、用意しておいた文句を述べることにより、無難に終えることができた。
　担任が汗田大学附属学院における校則などの注意事項を述べ、ホームルームはお開きとなった。担任がホームルームの終了を告げるやいなや、ハルヒは鞄を持って教室から出て行こうとした。そして出口まであと数歩というところで、一人の男子生徒に呼び止められた。
　ん、何だろう？　いくら容姿がいいとはいえ、あれほど変わったやつに話しかけるやつがいるとは。
　立ち上がり、近づいてみる。
　ハルヒを呼び止めていたのは、俺の知り合いの小泉純一というやつだった。小泉とは小学校時代からのつき合いで、彼は資産総額数兆円を誇るという巨大企業「小泉グループ」の総裁の一人息子である。中学三年のころには「卒業しても友達だぞ」などと互いに言い合っていたのだが、俺が進学先として家から一番近いという理由で汗田大学附属学院を選んだところ、たまたま小泉も家から一番近いという理由で汗田大学附属学院を選んでおり、結局二人とも同じ高校に入学してしまったというわけだ。悪いやつではないのだが、女ったらしなのが玉にキズで、今もたまたま見つけた美少女、ハルヒとお近づきになろうとしているのだろう。
　小泉に呼び止められたハルヒは真顔で、
「あんた、宇宙人か何かなの？」
　首を振る小泉。
「ふふ、面白い冗談だね」
　余裕の笑みで受け流す小泉。だが、ハルヒは「あそう」とだけ言うと、その後に「太郎」と続けながら、そそくさと教室を出て行ってしまった。
　一人取り残された小泉。俺が近づくと、小泉はさも立腹した様子で、
「はあ？　何だあいつは。俺が声をかけた女からあんな対応をされたのは初めてだ。俺は名誉ある小泉グループの跡継ぎであって、セメント企業とは関係ない」
「まあ落ち着け」小泉の肩を叩く俺。「本気で宇宙人を探してるのかもしれん」
「まさか。そういやチョン、さっき話しかけられたよな？」
　チョンというのは俺のあだ名だ。小学校時代、誰が言い出したのか、そのようなあだ名がつけられてしまったのだ。
「おいおい、高校でもその名で呼ぶのかよ？」
　言っておくが、俺は朝鮮半島出身ではないぜ。
「そりゃ、チョンはチョンだからな。ピョンやキャンよりましだろ。……いや、むしろキャンの方がイエス・ウィー・キャンって感じでいいか」
　一人ぶつぶつ言い始める小泉。
「いや、チョンでいい」

俺は小泉を残して教室から出た。階段に向かう生徒で混み合う廊下。遠くの方にハルヒが見えた。
教室から出てきた小泉が言った。
「どうした？」
「いや、俺もちょっとあいつが気になるから、つけてみようと思って」
「俺も行く」
人混みをかき分け、ハルヒの後をつける。階段を降り、一階の出入り口に来たところで、ハルヒは足を止めていた。
ん、なんだろう？
途方に暮れた様子で立ち止まっているハルヒ。俺たちが後ろから見守っていると、突然振り返った。俺と目が合うと、ずんずん近づいてきた。
今度は「あんた神？」などと聞かれるかと身構えていると、目の前にやってきたハルヒは俺の予想とはまったく異なる発言をした。
「地図ある？」
ちず？　英語で言うところのマップのことか？　まさかチーズじゃないよな。
俺が困惑していると、ハルヒが続けた。
「キャンパスの地図よ。入学案内の書類に同封されてたけど、持ってくるの忘れちゃったのよ」
「ああ、あるけど」
初めての登校に備え、一応持参してきていた。俺は鞄から A4 版の地図を取り出すと、ハルヒに渡した。
「借りるわよ」
そう言うやいなや、ハルヒは礼も言わずに歩き出した。
「ちょ、ちょっと。どこ行くんだ？」
ハルヒの後を追う。
ハルヒは地図に視線を落としたまま、
「宇宙人や神を探すには拠点となる場所が必要でしょ？　今から作りに行くのよ」
どこに？　などと聞く間もない。校舎から出て、ずいずいと中庭を直進していくハルヒ。小股だが、意外と足が速いので後れをとらないよう気をつける。
「な、なあハルヒちゃん」息を切らしながら、小泉が言った。「宇宙人なるものがほんとにいるとでも思ってるのかい？」
「もちろんよ。全校生徒二千名もの学校に入学したんだもの。すくなくとも三名はいると睨んでるわ」
それはどういう理屈だろうか。
聞き返す間もなかった。ハルヒはものすごい早足で中庭をつっきると、向かいの校舎に入っていった。階段を上り三階に到達すると、両側に部屋の並んだ長い廊下が現れた。
廊下の中央で立ち止まるハルヒに、俺が言った。
「ここどこ？」
ハルヒは無言で地図を指差す。ハルヒの白くか細い指は「73 号館 3 階 (部室棟)」という文字を差してた。
「今から空いてる部屋を探すわよ。せっかくだから手伝いなさい」
実力で占拠するつもりか？　まあ使われていないなら問題ないか。
命令口調が気にくわないが、ここまでついてきたついでだからと、ハルヒの持つ図をのぞき込む俺。部室棟の各部屋には、ご丁寧にも入居している部活動の名前が書かれていた。だが見た限り、空き部屋はないようだった。
「なんだ、どこもいっぱいじゃないか。諦めて帰ろうぜ、ハルヒちゃん」

　小泉が言った。
「なに言ってるのよ。こんだけ部室があれば、どこかは休眠状態になってるはずよ」
　なるほど。
　三人で地図を見つめることしばらく、ハルヒが言った。
「とりあえずこの読書部ってとこ行ってみましょ。近年出版不況らしいから、人少ないはずよ」
　読書部は部室棟の最も端にあるとされていた。ハルヒを先頭に、長い廊下を歩く俺たち。突き当たりまで来ると、ハルヒは読書部という薄汚れたプレートの貼られたドアを叩いた。
「こんにちは〜」
　中に入っていくハルヒ。
　教室の四分の一ほどの室内はカーテンが閉められ、薄暗かった。誰もいないのか？　そう思ってよく目をこらしてみると、長いテーブルの端に一人の少女が座っているのに気づいた。小柄な、黒髪のショートヘアー。ハルヒの闖入に眉ひとつ動かすことなく、電話帳と思われる分厚い本を読んでいた。
　なんだ、人いるじゃないか。これは引き返すほかないな。
　だがハルヒはそんな彼女に目もくれず、
「うん。ある程度広いし、ここいいわね。テーブルもあるから会議にも使えそうだし」
　独りうんうんと頷いていた。宇宙人を捜すハルヒにとっては黙々と本を読む黒髪の少女など眼中にないらしい。
　これではハルヒにやめるよう言ってやらなければと思っていると、小泉が読書にふける少女に話しかけていた。好みの子を見かけるとすぐ言い寄ってしまうのが小泉の悪い癖だ。これを生物学的には刺激に対して正の走性があるというそうだ。
「キミ、かわいいね」
「……」
　少女なにも言わず、黙々と本を読んでいた。その顔は真剣そのものだ。
「ねえ、何読んでるの？」
　小泉の質問から数秒おいた後、まるで合成音声と思われるほど抑揚のない声が返ってきた。
「職業別電話帳」
「そ、そうなんだ。面白そうだね。はは……」
　愛想笑いを浮かべる小泉。
「ここの部員なの？」
　頷く。
「俺も読書部に入っていいかな？　キミみたいな美しい女子生徒ともにこれからの三年間を過ごしたいんだ」
　頷く。
　二人の様子を遠巻きに見ていたハルヒが俺に言った。
「ほら、入っていいって言ってるわ」
「いや、お前にじゃないだろう」
「大丈夫だって」
　会話を続ける少女と小泉の間に割って入るハルヒ。すると今まで電話帳から目を離さなかった少女が不意に顔を上げた。彼女の黒く大きな瞳に、ハルヒが映る。
「ねえ、私たちもここにいていいかな？　まあ、ダメって言ってもいちゃうんだけど」
　それは許可のとり方として著しく不適切ではないか？

　だが少女は無感情な声で、
「いい」
　とだけ言った。
「ほら」
　ほれみろと言わんばかりにほほ笑みを投げかけてくるハルヒ。
　しかたない。かなり無理矢理だったように思われるが、本人がいいと言うならまあいいか。
「ところでキミ、何て言うの？」
　いまだ本を読み続ける少女に、小泉が言った。
「夜比奈みるく」
　みるくだと？　その無機質な合成音声のような声からして、はちゅねミクの間違いじゃないのか？
「へえ、みるくちゃんか。かわいいね」
　みるくさんの頭に手を伸ばす小泉。みるくさんはなにも言わず、おとなしく髪を撫でられている。小泉め、なれなれしくしおって。
　なにか言ってやろうと思ったそのとき、シャーっという音とともに部屋が明るくなった。顔を上げると、ハルヒがカーテンを開けていた。窓の外には校門に続く並木通りが見えていた。
「ふーん、けっこういい眺めじゃない。気に入ったわ」
　続いてハルヒは部室の備品と思われるサイフォンからカップにコーヒーをつぎ始めた。どうやらすでに部室を私物化してしまったらしい。
「おいおい、やめろって」
　さすがに得体の知れない闖入者にここまでされては、部員であるみるくさんがかわいそうだ。破天荒なハルヒに怯えているだけで、本当は部室から一刻も早く出て行ってほしいに違いない。
　だがハルヒは手を止めることなく、
「大丈夫よ。あんたの分もちゃんとあるから」
　きれいに洗い置きされていたカップに、次から次へとコーヒーを注いでいく。
「いや、そう言う問題じゃ――」
　そう言おうとして、あることに気づいた。カップがいくつもあるということは、ここにはみるくさん以外の部員も来るということだ。ならなおのこと、俺たちがここを占領していい理由はない。俺はハルヒの腕をつかむと、
「ハルヒ、行くぞ」
　引っぱった。だがハルヒはその場から一歩も動こうとせず、淡々とコーヒーを注いでいる。強情だな。
　それどころか、あろうことかみるくさんは俺の心を見透かしたかのように、
「カップは予備。私以外の部員はいない」
　不思議なことがあるものだ。まさか俺と心が通じ合うのか？　いや、ひょっとすると実は俺か小泉に惚れていて、俺たちにここにいてほしいと思っているのか？　真実は定かではないが、彼女のその発言が、ハルヒの行為に無用な追認を与えてしまったことは確かだった。
　ハルヒはコーヒーを注いだカップをすべて机に置くと、
「さ、部屋も確保できたことだし、お茶にしましょ」
　みるくとは反対側のテーブルに着いた。しかたなく黙ってハルヒの前に着席する俺。小泉はみるくさんの前に座った。
　ずずっとコーヒーを口にするハルヒ。音を立てるな。
　みるくは手にしていた本をテーブルの端に置くと、カップを傾け始めた。ハルヒと違って、少しずつ飲

んでいく姿がかわいらしい。俺がみるくさんに見惚れていると、ハルヒが言った。
「ところであんた――いや、名前なんて言うの？」
　こちらを指差すハルヒ。「あんた、宇宙人？」などという突拍子もないあいさつをしておきながら、俺が自己紹介で述べた名前を覚えていなかったと見える。やれやれと思いつつ、俺が自分の名前を言おうとすると、
「チョンだよ」
　小泉が言った。
　余計なことを言うな。
「へえ、そうなの。ふ〜ん」
　納得するハルヒ。
　俺が否定しようとすると、小泉がみるくさんに、
「あいつとは小学校時代からの仲なんだが、チョンっていうんだ。ほんと、珍しいよな」
　頷くみるくさん。いや、あっさり同意されても困るのだが……
「それで、あんたは？」
　小泉を向き、ハルヒが言った。さっきはナンパをさらりと受け流していたが、やっと名前を聞く気になったらしい。だが小泉は小泉で、もうハルヒよりみるくさんに夢中になっていたらしく、
「ん？　ああ、小泉純一」
　とだけ言いい、みるくさんとの会話に戻ってしまった。
　それきりハルヒはなにも言わず、外の景色に目をやりつつコーヒーカップを傾けていた。
「なあハルヒよ、宇宙人だとか神だとか言っていたが、本気でそんなものを探してるのか？」
　ハルヒはこちらを向くと、
「ええ、そうだけど」
　さらりと言った。
「だけどさ、宇宙人だとか神だとかって常識的におかしいだろ。月にウサギはいなかったし、『神は死んだ』っていうじゃないか。それなりにいい高校に入ったんだ。部室を不法占拠してそんなの探すより、ちゃんと勉強して大学いった方がよくないか？　新入生代表のあいさつをしてたからには、それなりに頭いいんだろ？」
　首を振るハルヒ。
「勉強していい大学に行っていい会社に行く――そんなありきたりな人生のどこが面白いのよ？　砂粒のような大衆の大部分はそういう道を歩みたがるけど、敷かれた線路の上を進むことならそこいらの電車やジェットコースターに任せとけばいいわ。そんなくだらないことをするために、私のいい頭はあるんじゃないもの」
　おっ、頭がいいと自認しているな。
　また一口、コーヒーカップを口にするハルヒ。
「それに、まだ宇宙人とかがいないって決まったわけじゃないわ。チョンがそんなのはいないって思うのは、『宇宙人なんて存在するはずがないんだ！』っていう固定観念に囚われているからよ。だけどそれは宇宙人の存在を否定する理由になっていないわ。もっと客観的に物事を見ないと」
「はあ」
　俺もコーヒーを口にする。すると、今までみるくさんと話していた小泉が口を挟んできた。
「一般に、『ない』という証明はできない。『ある』ことが証明できなければ『ない』ということさ」
　小泉を見るハルヒ。その鋭い視線は、心なしか、小泉を睨んでいるようで怖い。

　ハルヒはコーヒーを一口飲むと、
「では、『ある』という証明ができなければ、『ない』という理由を説明できるかしら？　これは『ない』という証明ではないわよ」
　まずい。こいつは議論になると一歩も引かないタイプだ。しかもそれなりに頭がいいらしい。俺の知ってる小泉の能力からして、小泉の採った行動はやぶ蛇といわざるを得ない。
　ハルヒが続ける。
「平面とされていた実は地球が丸かったように、過去、我々が前提としてきた価値観が覆った例は数え上げればきりがないわ。重力だって昔はないとされてた。だけど重力は昔からあったし、今もある。存在が証明できなければないなんていうのは、ただの思いこみよ」
　小泉は鼻で笑うと、
「なら早く宇宙人とやらを連れてくるんだな」
「ええそうね。手伝わせてあげるわ」
　これ以上、二人だけに話をさせておくとまずそうな雰囲気だ。
「ところでハルヒ」俺が言った。「で、その宇宙人とかいうのを見つけたらどうするんだ？」
　ハルヒは少し考えてから、
「そうね。今のところは一緒に遊ぶことくらいしか考えてないわ」
「はい？」
　目が点になる。
　これだけ引かれた線路がどうの、存在がうんぬんといっておきながら、一緒に遊ぶだと？　せめてノーベル賞を取りたいくらいの発言は聞けると思っていたが。
「私の当面の目標は、財産が尽きるまで自由奔放に暮らすこと。今のところ、それ以外は考えてないわ」
　ん、財産？
「お金、あるの？」
　突如、機械のような無機質な声が響く。紛れもない、みるくさんの声だ。というか、なぜそこにだけ反応する？　他にもつっこみどころはあっただろう。証明の話とか。
　ハルヒはすまし顔で、
「ええ、私は村上フォンドの跡継ぎだから」
　これは驚いたね。村上フォンドといえば、デッドドアによる放送局買収騒ぎにおいて日本中を震撼させた、世界に名だたる巨大持株会社だ。ハルヒはそこの跡取り娘だったのか。
　隣に目をやると、俺以上に驚いている小泉の姿があった。
　先ほどまでの冷静さはどこへ行ったのか。見るからに敵意のこもった眼差しでハルヒを見つめている小泉。その拳がわなわなと震えているように見えるのは、俺の目の錯覚ではないだろう。
　昔、何かの書籍で読んだことがあるが、村上フォンドと小泉グループはその前身となる組織が百年ほど前から対立関係にあったらしい。その上、最近の報道によると、プロクシー・ファイトと呼ばれる斬新な戦法を採る村上フォンドの攻勢に、小泉グループは国内における影響力を奪われつつあるそうだ。往年のライバル企業、村上フォンドの次期総裁を前にして、小泉の心は穏やかではいられないということか。
　ハルヒはコーヒーを一口飲むと、落ち着き払った様子で言った。
「あらあら、そう怖い顔しないの。小泉グループの跡取り息子さん」
「なっ…」
　思わず声を上げる。まさか、ハルヒは小泉が小泉グループの跡継ぎだと気づいていたのか？　いや、ただ名前だけではそこまで断定できないはずだ。

「いつ気づいた？」
　小泉が言った。
「今よ」
　ハルヒは立ち上がると、カップを持ってサイフォンに向かった。コーヒーを注ぎながら、
「だってあなたがそこの跡継ぎじゃなきゃそんな反応しないでしょ？　私だって驚いたわ。さっき名前を聞いたときはあれっと思ったけど、まさかほんとにそうとはね。小泉グループの跡継ぎが同い年だとは知ってたけど、まさか同じ学校とは思わなかったわ。それに、もう少ししっかりした人だと思ってたから、あなたとは違うのかと」
　さらりとひどいことを言っていないか？　あまり怒らせるなよ。こう見えて小泉は柔道二段だぜ。
　コーヒーをつぎ終え、戻ってきたハルヒ。
「というか、あんたが小泉グループの次期総裁なら、私は正体を明かすべきでなかったわね」
　溜息をつくハルヒ。その方がお互い気楽だったということか。
　小泉が言った。
「いや、いずれ気づくことだ。早めに知っておいてよかった」
　そうだよな。「ハルヒちゃん」なんてなれなれしく呼んでた相手が、ある時急に対立するグループの総裁に就任したときの驚きは計り知れないはずだ。
　ハルヒはカップを傾けると、
「それもそうね。だけど何でよりによって同じ学校なのよ？　高校なら全国にごまんとあるじゃないの」
　頬をふくらませるハルヒ。対立するグループの次期総裁と図らずも相対してしまったことにご不満の様子だ。
　俺が言った。
「まあ汗田大学附属学院は世間的に名の通った、一応は名門とされる高校だ。この近辺に住んでる、ある程度金のあるやつが集まってくるのはしかたないだろ」
「だけどね、私は宇宙人や神を探すために人数の多い高校に入ったんであって、小泉グループの次期総裁に会いに来たんじゃないわよ」
　宇宙人や神を探すことを主たる目的に高校に入るとはいい度胸だ、ハルヒ。
「ふっ、そんなものがいるわけないだろ。探すと言っているが、一体どうやって探すつもりだ？」
　鼻で笑う小泉。
「そうね、とりあえず近いうちに募集のビラを貼らないといけないわ」
「はい？」
　目が点になる。募集のビラだと？　まさか「宇宙人や神を探しています。いたら来てください」と書くつもりか？
「……どういうこと？」
　さすがに疑問に思ったのか、ハルヒの発言につっこみを入れるみるくさん。
　ハルヒは人差し指を立て、
「いい？　ビラと言ったらビラでしょうが。校舎中に貼るのよ。もちろん文言は、『宇宙人や神を探しています。宇宙人や神の方はハルヒまで連絡ください』よ」
　そのまんまだった。
　隣を見ると、笑いを堪えている小泉がいた。それに気づいたハルヒが小泉をびしっと指差す。
「こら、そこ。笑わないの」
　小泉は目に涙を湛えながら、

「はは、さすがは天下の村上フォンドのお嬢様だ」
　その態度が気にくわないのか、頬をふくらませるハルヒ。
「笑わないの。近いうちにビラを貼るから、手伝いなさいよ。校舎の壁という壁に貼るんだから」
　笑いのおさまった小泉はハルヒに向き直ると、
「いいだろう。お前の名が全校に駆けめぐるのを手伝ってやる」
「ええ、なんとでも言いなさい。宇宙人や神が見つかってから反省したって遅いんだから！」

翌日、四限目の体育が終わったあと、俺は部室棟に向かう中庭を歩いていた。昨日はハルヒが今日の昼休みに集合するように言い、お開きとなっていた。ハルヒによれば、今日からビラを出す準備をするらしい。
長い廊下を歩き、読書部の前にやってきた。軽くノックしたあと、ドアを開ける。カーテンの閉ざされた薄暗い室内では、みるくさんが独り電話帳と思われる本を読んでいた。
電話帳は読み物として適切ではないのではないかという疑問はともかく、俺はカーテンを開け、コーヒーを注いでハルヒたちが来るのを待った。
待つこと十分。ハルヒたちの来そうな気配はなかった。宇宙人探しなどはなから興味のない小泉はともかく、ハルヒが来ないのはおかしい。
しかたなく俺は今日初めて開いたばかりのドイツ語の教科書を取り出し、ペラペラとめくってみた。だがハルヒが現れる前に、教科書のすべてのページをめくり終えてしまった。
ほかにすることもない俺は、教科書をしまい、黙々と読書を続けるみるくさんに目をやった。よく見てみると、みるくさんの目は小刻みに左右に動いており、電話帳といえどちゃんと読んでいることがうかがわれた。
しかしなぜ電話帳を読んでいるのだろう？　円周率の暗記の世界記録があるくらいだから、日本全国の電話番号を暗記する記録というのがあるのか？　……とにかく、ちゃんと内容を覚えているか訊いてみよう。
「なあ、みるくさん？」
声をかけてみるものの、みるくさんはぴくりとも反応しない。
俺はみるくさんの開いているページが教育機関についてのものでないことを確認してから、自分の携帯電話に登録していた学院の電話番号を表示した。
そして、
「学院の電話番号は？」
しばらく間をおいたあと、みるくさんの無機質な声が返ってきた。その番号は、自分の携帯に表示された番号と一致していた。
「おお、すごいじゃないか。みるくさんがいれば電話帳は必要ないな」
思わず声を上げる。
だがみるくさんは見向きもせず、目の前の分厚い本とにらめっこしている。その真剣な眼差しを見ていると、これ以上みるくさんの邪魔をするのはわるいように思われた。
それからさらに二十分後、どたどたという足音が聞こえたかと思っていると、何やら大きな荷物を抱えたハルヒが入ってきた。
「ごめん、遅くなって」
一抱えもある大きな段ボールを地面に置くハルヒ。
「あれ、小泉総裁いないの？」
部屋を見回して、ハルヒが言った。
「ああ、来てない」
「しょうがないわね。じゃあ代わりにみるくちゃん手伝ってね。今からビラ作りに使うパソコンを入手しに行くから」
ハルヒは段ボールを開けると、中から紺色のトレンチコートをとりだし、俺に渡した。そしてもう一着をみるくさんに渡し、最後の一着を自分で着始めた。
なぜパソコンを買いに行くのにコートを着る必要があるのだろう？
戸惑うみるくさんと俺に、ハルヒが言った。
「いいから着なさい」

　言われるがまま、トレンチコートに身を包む俺たち。トレンチコートは丈が長く、背の低いみるくさんは裾が地面にこすりそうだ。
　コートを着たハルヒは、自分の鞄から書類の入ったクリアファイルを取り出した。そして中から一枚の紙をとり出そうとして、その紙を取り落とした。
「あら」
　ひらりと、俺の足下に舞降りてきた紙。俺が取り上げて見てみると、

　村上ハルヒ　君
　貴君は学院の一般入学試験に合格したことを証明する。

　という文言のあとに、学院長の名前が記され、大きな四角い印鑑が押されていた。
「……え？」
　呆然とする俺。同じ合格通知は以前俺も受け取ったが、わざわざその書類を入学後に持ってくる意味はなんだ？
「あ、ありがと」
　俺の手から入学通知を回収するハルヒ。
「おい、なんだそれ？」
　首を傾げるハルヒ。
「ん？　見てのとおり学院の合格通知だけど」
　いや、そういうことではなく……
「日本って印鑑に対する信仰が厚いでしょ？　だからこういう大きめの、権威を感じさせる印影を持ってきたのよ」
　合格通知をひらひらさせるハルヒ。確かに日本における印鑑の重要性はあらためて強調するまでもないが、ハルヒの言っていることは理解できない。
　ハルヒは部室のドアを開けると、
「じゃあ行くわよ」
　出て行ってしまった。
　みるくさんと顔を見合わせる俺。ついて行かないと怒られそうなので、ハルヒの後を追う。
　風を切り、早足で廊下を進むハルヒに、俺が言った。
「ちょっ、どこ行くんだ？　パソコンを手に入れるとか言っていたけど」
「いきもの研究会、通称いきものがかりよ」ずんずん進んでいくハルヒ。「けさ確認したところ、使えそうなのがあったのよね」
「もらえるのか？」
「ええ、もらえるわよ」
　廊下の中程まで来ると、ハルヒは「いきもの研究会」と書かれた紙の貼ってあるドアの前で足を止めた。そして勢いよくドアを叩くと、
「こんにちは！　東京地検特捜部です！」
　はい？　目が点になる俺。
　だが俺以上に驚いたのは当然中の人たちだ。しんと静まりかえった室内に、ハルヒは意気揚々と入っていく。
　やむを得ず、あとに続く俺たち。

　読書部の一・五倍ほどの室内には、ネコやウサギの入ったいくつものケージが置かれ、窓際の机には一台のノートパソコンとプリンターが置かれていた。
　中にいた女子生徒の一人が、ずかずかと部室の中程まで押し入ってきたハルヒに言った。
「あ、あの？　なな、なんなんでしょうか……？」
　怯えた様子の女子生徒。
「部長はいるかしら？」
「えっ、部長なら今席を外していますが……」
「じゃあ、その次にえらい人は？」
「副部長なら私だけど」
　白いネコに餌をあげていた女子生徒が立ち上がった。
　ハルヒはこほんと咳払いすると、
「この部室のパソコンから犯行予告があった容疑で、家宅捜索を行うわ」
　そう言うやいなや、窓辺の机に近づくと、ノートパソコンの AC アダプターをコンセントから引っこ抜いた。内蔵電池が摩耗していたのか、プシュンと音を立てて電源が切れる。
「ちょ、ちょとまってください。それ、部長のです」
　とめに入る副部長。だがハルヒは、
「何を言うか。この最高裁判所の令状が目に入らぬか！」
　懐から取り出した学院の合格通知を、堂々と女子生徒の眼前に突きつけた。
「ひぇっ！　す、すみませんでした！」
　顔を背け、後ずさる女子生徒。ちゃんと内容を確認しろ。
　ハルヒは唖然として立ちすくむ俺たちに振り向くと、
「これ。事務官も手伝いなさい」
　ここで断るとあとで何を言われることか。しかたなく俺はハルヒを手伝うことにした。パソコンのある机に近づくと、
「プリンターを頼むわ」
　俺は、プリンターから AC アダプターを外すと、あとから着いてきたみるくさんに渡した。
　ハルヒも AC アダプターをみるくさんに渡すと、ノートパソコンを持ち上げ、出口に向かって歩き始めた。だが最初に俺たちに対応した女子生徒が、ハルヒの前に立ちはだかった。
「ちょっ、ちょっと待ってください。犯行予告なのに、プリンターまで持って行くんですか？」
　まずい。なんと説明する気だハルヒ？
「我々の捜査に間違いなどないのだ。それとも村樹さんのように二百日も勾留されたいのか？　ああ？」
「い、いえ。し、失礼しました」
　ハルヒの剣幕に、後ずさりする女子生徒。
　俺たちはノートパソコンとプリンターを持って、無事、部室を出ることができた。
　読書部の部室に戻ったハルヒは、さっそく機器の設置にとりかかった。ノートパソコンとプリンターをテーブルの上に置き、近くのコンセントから電源をとる。
　電源を入れると、風を切るファンの音とともに、パソコンが立ち上がっていく。
「おお、うまくいったわね」
　満足そうな顔でパソコンを操作するハルヒ。ワープロソフトを起動し、ビラの作成に取りかかる。
　手持ちぶさたな俺とみるくさんは、コーヒーをのみながらハルヒがビラを作り終えるのを待つことにした。俺はハルヒの隣に、みるくさんは俺の向かいに座った。

「そういえばハルヒよ」
　パソコンの画面をのぞき込みながら、俺は先ほどから感じていた疑問をぶつけてみることにした。
「ん、なによ？」
　ハルヒは目にもとまらぬ速度でキーボードを打ち続けている。
「なぜパソコンを購入しなかった？」
　これは至極もっともな疑問だろう。村上フォンドと言えば、資産総額数兆円ともいわれる大企業だ。その総裁の娘が、パソコン一つ買う金さえ自由にならないということはないはずだ。ならなぜパソコンを購入せず、強奪するような真似をするのだろう？
　ハルヒはパソコンを向いたまま、
「私は子供のころから宇宙人などを探しているわ。だけど探すのにお金をかけすぎて父上に怒られちゃってね。それ以来、そういう目的で小遣いを使うのを禁じられてるのよ」
　なるほど。確かに天下の村上フォンドの総裁としては、自分の跡継ぎとなる人物が、将来、宇宙人捜しにグループの資金をつぎ込んでしまうという事態は避けたいだろう。
「それでいくら使ったんだ？」
　ハルヒはキーボードを叩く手を止めない。時折キーの上段に指が伸びるところからして、おそらくカナ入力だ。
「よく覚えてないけど、八千万くらいかしら」
「なんだと？」
　都会に豪邸が建つではないか。村上フォンドの総裁の娘とは、そんなに小遣いがもらえるものなのか？
　子供のころから一緒にいる小泉だってそんなにもらってないはずだ。俺も産まれたかったぜ、村上家に。
　ハルヒが言った。
「投資で増やしたのよ。もらった小遣いをね。あのころはまだルービン・ショック前だったから、株式とか為替とか組み合わせて、年利二〇〇パーセントくらいで運用できたわ」
　年利二〇〇パーセント？　小遣いのほとんどを年利一パーセントにも満たない銀行に預けている俺には想像もつかない数字だ。投資の才能があるのだろうか。
「それで、その金を何に使ったんだ？」
「それは秘密。結局、宇宙人は見つからなかったし、言ってもしかたないわ」
　そうかい。まあ今考えていることが宇宙人を募集するビラの作成だから、大したことには使わなかったのだろう。俺が言うのもなんだが、ハルヒに使われた八千万円がかわいそうでならない。
　ふとハルヒは手を止め、立ち上がった。自分の鞄から、ルーズリーフを取り出すとプリンターに入れた。そして再びパソコンを操作する。
　プリンターが動き出し、一枚のルーズリーフに文字が印刷された。ハルヒはその紙を手に取り、眺めたあと、
「どうかしら？」
　俺に手渡してきた。
　そのビラには次のような文言が記されていた。

　宇宙人・神等大募集!!
　宇宙人や神は私のところに来てください。一緒に遊びましょう。
　宇宙人や神を知っている方は私に紹介してください。薄謝を進呈します。
　昼休みは読書部で待ってます。

一年Ｋ組　村上ハルヒ

　そしてそのあとには連絡先としてメールアドレスが記されていた。
　言葉を失った俺。
　なんとコメントすべきか。相手は村上財閥の次期総裁だ。下手に辛辣な意見を述べてにらまれるより、よくできましたと言うべきか？　いや、むしろ村上家におけるハルヒの使用人のそういう姿勢が、ハルヒの自由奔放すぎる性格を助長してしまったのではないだろうか。ここで俺が強く言い聞かせてやるべきか？
　俺が言葉につまっていると、みるくさんが俺の手からビラを取り上げた
　みるくさんはビラの内容を一読すると、
「いい」
　とだけ言った。なぜだ。
　俺が腑に落ちないという顔をしていると、みるくさんが言った。
「簡潔」
　ハルヒは満足そうに笑みを浮かべ、
「よかった」
　そしてまたキーボードを叩くハルヒ。数秒後、プリンターが動き出し、同様の文面が大量に印刷され始めた。
　ちょっと待てハルヒ。こんなビラを学院の校内に貼りまくった日には、お前は全校の笑いものになってしまうだろう。
「じゃあ、さっそく貼りに行くわよ」
　立ち上がり、印刷されたルーズリーフをとんとんそろえるハルヒ。
　止めなければ。「ついてきなさい」などと言いながら、鞄を持って部室を出ようとするハルヒの手を、俺はつかんだ。
「待てハルヒ。早まるな」
　こちらを振り向き、怪訝そうな顔をするハルヒ。俺は手を放した。
「勝手に貼るのはよくないだろ。まずは校則を確認して、貼っていいか調べたほうがいい」
　学生が壁に無断でビラを出していいなどという規則は存在しないはずだ。そのことがわかれば、ハルヒだって納得するはずだ。いくら人の言うことを聞かないハルヒとはいえ、問題を起こして処分を受けたくはないだろう。
「それもそうね。何か書いてないか、調べてみましょう」
　ハルヒは鞄を置くと、入学後に送られてきた書類に同封されていた、学院生活の手引きと書かれた冊子を取り出した。
　おっ、用意がいいな。そんなの俺は持ち歩いてないぞ。というか、まだ開いてさえいない。きっと今ごろはタンスの奥底に眠っているはずだ。
「あ、あったわよ」
　笑みを浮かべるハルヒ。
　ちょっと待った。何があったって？　ハルヒの笑顔からして、嫌な予感だ。
　ハルヒの持っている冊子をのぞき込む俺。ハルヒの細く白い指は、次の文を差していた。

　学生がビラ等を掲示する場合は、ゲート下の学生用掲示板を用いること。校舎の壁等への掲示は認められない。

がーん。ハルヒに都合のよい規則が存在していた。さすがは学院。自由を重んじると喧伝しているだけのことはある。
ところで、ゲート下ってどこだ？
その疑問はハルヒと共通だったらしく、ハルヒはすでに校内の地図を参照していた。
「あ、ここね」
ハルヒが地図を指差す。そこは学生の大部分が登下校時に通過する校舎の一階部分のことだった。
まずい。そこがものすごく人目につきやすい場所であるとことは多言を要さない。そこに設置されている掲示板にそのビラを出した日には、ハルヒは全校で二千人いるとされる学院生の嘲りの的になってしまう。
「さ、貼っていい場所もわかったことだし、出発するわよ」
自分の鞄を持ち上げ、肩にかけるハルヒ。
俺はみるくさんに助けを求めることにし、そっと耳打ちしてみた。
「おい、ハルヒになんとか言ってやってくれないか？　同じこの部室を利用する者として、この部室が全校の好奇の目にさらされることは避けたいだろ」
だがみるくさんは表情一つ変えず、
「何て？」
とだけ言った。
いや、それがわからず困っているんだろ。ハルヒのことだ。普通に「そんなの貼らない方がいいよ」などと言ったら、憤慨して、かえって多くの紙をいたるところに貼りつけるに違いない。
「何やってんのよ？　行くわよ」
ドアのノブに手をかけているハルヒ。こうなったらもう諦めてハルヒの言うとおりにするしかない。一度恥をかけば、ハルヒも懲りるだろう。
俺とみるくさんはハルヒについて部室を出た。いきもの研究会の部室を早足に通り過ぎ、部室棟を出る。
ゲート下と呼ばれる、71 号館の一階部分にやってきた。昼休みもあと十分で終わるとあって、次の教室に向かっていると思われる生徒がせわしなく行き交っていた。そしてその側面にある掲示板にはラグビー部や軟式野球部など、学院を代表する部活動のビラがところ狭しと張り出されていた。
ここに貼るのか？　あのビラとやらを。
ハルヒは鞄を足下に置くと、掲示板に刺さっていた余分な画鋲をとり、自らのビラを貼り始めた。一つビラを貼り終えると、ビラの一部を俺に差し出した。
「ほら、チョンも手伝いなさいよ」
受け取った俺は、その一部をみるくさんにも渡した。みるくさんは掲示板に近づくと、背を伸ばし、掲示板の上の方にある画鋲を外そうとした。だが、あとちょっとのところで届かない。
俺は横から手を伸ばし、画鋲を外してみるくさんに渡してやった。するとみるくさんは黙ってビラを貼った。……貼ったのはいいが、そこはラグビー部の B4 版のビラの上だった。
「ちょ、ちょっとみるくさん」
いくらなんでも他の団体の上に貼るのはまずいだろう。怒ったラグビー部の連中が読書部に詰めかけてきたら大変だ。
だがみるくさんは黙ってハルヒを指差した。見れば、ハルヒは自らのビラを、思いっきり他団体の上に重なるように貼りつけていた。
「ちょっと待てハルヒ」

　俺は新たに画鋲でビラを留めようとしていたハルヒの手をつかんだ。
「ん？」
　怪訝そうに俺を見るハルヒ。その黒く大きな瞳は、視線こそ鋭いものの、とても澄んでいて、見ていると吸い込まれそう――などと考えている場合ではない。
「どこに貼ってんだよ？」
　すでにハルヒが貼り付けた数枚のビラを差す俺。そのほとんどは他団体のビラの上にはりつけられていた。だがハルヒは動じることなく、新たに軟式野球部のビラの上に自らのビラを留めた。
　ちょっとハルヒさん、聞いてますか？
　俺はハルヒの肩を叩いてみた。
「おい、ハルヒ」
「どこって、学生用掲示板にでしょうが」
　やっと反応したハルヒ。だがその視線は、新たにいきもの研究会のビラの上に貼りつけられようとしているビラに向けられていた。
「いや、そこ、他団体のビラの上なんだけど」
「何言ってるのよ？　あそこに書いてあるでしょうが」
　掲示板の上の角を指差すハルヒ。そこには小さな字で「張り紙は最大で A4 まで」と注意書きがあった。
　なるほど。規定のサイズを超過しているのは、ハルヒ的には適切な掲示物と認められないわけか。……いや、だからといって堂々とその上に貼るのはどうかと思うぞ。
　俺がハルヒに注意しようと思ったとき、後ろの方がざわついているのに気づいた。振り向いてみると、何人かの女子生徒がハルヒの貼ったビラを見ながら話をしていた。
　もう気づかれたか。いや、こんな人通りの多いところ、他団体のビラの上に堂々と重なるように貼っていれば、嫌でも目につくか。
　俺はビラの貼り付けに没頭しているハルヒはひとまず放っておき、女子生徒たちの声に耳を傾けてみた。
「あはは、何これ面白い！」
「ほんと。宇宙人と神を探してるなんて」
「以前、中庭でキリンを飼うって言ってた生徒会長いなかった？」
「ええ、また変な人が現れたみたいね」
　ビラを貼っているハルヒを横目で眺める女子生徒。
　キリンを飼うだと？　なんだそれは。ともすればハルヒ以上だ。
　女子生徒の一人がおもむろに携帯電話をとりだし、ハルヒのビラを撮影した。
「みんなに送ってあげよ」
　余計なことをしないでくれ。ただでさえ多くの生徒の目につくところに貼ってしまったというのに、みんなに送るだと？　これではハルヒの名が全校を駆けめぐるのも時間の問題だ
　だがハルヒはそんな女子生徒たちを気にとめる様子もなく、ゆっくりと手にしていた最後のビラを貼りつけた。そして数歩下がり、掲示板の全体を確認する。他に貼る場所が見つからなかったのか、ハルヒは鞄を担いで俺のところにやってきた。
「さ、帰るわよ」
　俺とみるくさんの手から余ったビラを回収する。
　ハルヒについてその場をあとにする俺たち。直近の曲がり角で振り返ってみれば、掲示板の前にはさらに多くの人が集まり始めていた。

放課後、俺はハルヒに連れられ読書部に向かっていた。ハルヒが言うに、ビラに掲載したアドレスにメールが送られてきていないか確認するらしい。どうせいたずらメールくらいしか来てないだろうけどな。
中庭を突き抜け、部室棟に入る。三階へと続く階段を上りきると、長い廊下が現れる。読書部に向かう途中、俺はふといきもの研究会の前で足を止めた。
ハルヒが振り返り、俺の手を引っぱった。
「ちょっと、早く来なさい」
小声で言うハルヒ。たしかにいきもの研究会の人と鉢合わせしたらまずいものな。
だが俺は黙ってドアを指差した。そこにはノートの切れ端と思われる紙に、手書きで次のような文言が書かれていた。

そろそろノートだけでもいいから返してもらえないと活動に支障がでるのですがどんなもんなんでしょうか…

わるいことしたな、俺たち。
俺がそう感じていると、ハルヒは黙って俺の手を引いた。
読書部に入ると、みるくさんが独り本を読んでいた。俺たちは放課後すぐここに向かったというのに、もういるとはお早いお着きで。そういえば俺がここに来るときは、いつもみるくさんが先にいるな。まさか昼間から授業をさぼってずっとここにいるのか？
ハルヒは席についてノートパソコンを開いた。俺はみるくさんと自分のコーヒーを注ぎ、ハルヒの正面で本を読むみるくさんの隣に座った。見てみると、みるくさんの読んでいる本が以前の電話帳から精密地図に変わっていた。
なるほど。電話帳は読破したのか。
地図を眺め続けるみるくさんを見つめながら、カップを傾ける俺。ノートパソコンの強奪やら人前でのビラ貼りなど、今日の疲れがどっと押し寄せてきた。うとうとしてきた俺はカップを置き、テーブルに突っ伏した。そしていよいよ眠りの世界に入ろうとしていると、弾むようなハルヒの声が聞こえてきた。
「ちょっとチョン、いっぱい来てるわよ」
何だと？　あんな荒唐無稽なビラに掲載されたアドレスにメールを送るやつがいるだけで不思議だが、いっぱい来ているとは。
俺は起きあがり、ハルヒの隣に行ってみた。笑顔でパソコンの画面を指差すハルヒ。そこには「受信箱(新着 27 件)」と表示されていた。
カチリと、受信箱をクリックするハルヒ。表示された受信箱の中身は次のようなものだった。

お探しの子がきっと見つかる！　完全無料出会い系サイト
きらめく出会いをあなたに。完全無料のラブリーメール
当選のおめでとうございます！　フリーで出会いをするは簡単です！

唖然とするハルヒ。
俺がマウスに手を伸ばしてスクロールしてみると、似たような件名のメールしかなかった。残念だなハルヒ。お前の相手をしてくれるのは迷惑メールくらいしかないようだ。
「まあこんなもんだろ」俺は愕然と画面を見つめているハルヒの頭にポンと手を乗せた。「迷惑メールフォルダに振り分けきらないほど大量に来てることから見て、おそらくこのアドレスを誰かがネットの掲示板

とかに貼った可能性が高いな」
　ハルヒは振り返ると、首を振った。
「……ま、まだビラを出して数時間だから。根気よく待ってみましょう」
　だがそう言うハルヒは明らかに気落ちしている。みるくさんはなにも言わず、コーヒーを口にしていた。
　ハルヒはおもむろに立ち上がると、
「ちょっと待ってて」
　と言うと、出て行ってしまった。
　ん、なんだろう？
　残された俺はパソコンの前に座り、もう一度メールの一覧を確認してみた。一通くらいはハルヒ宛てのメールがないかと思ったが、そのようなものは一つもなかった。ビラの内容が内容だけに、いたずらメールさえ来ないか。
　ハルヒがいなくなり、急に静かになった部室。音といえば、時折サイフォンから滴るコーヒーと、みるくさんがページをめくる音くらいしかない。
　俺が椅子にもたれてぼうっとしていると、それまで読書に没頭していたみるくさんがにわかに起立した。そして俺の隣に歩いてくると、手にしていた本を手渡した。
　都市部精密地図。表紙にはそう書かれていた。
「読んで」
　それだけ言うと、もとの位置に戻るみるくさん。
　ちょっと待った。なぜ俺に？　というかこれは読み物として適当か？
　疑問符が頭を埋めつくす俺の視線は気にもとめず、普段と変わらぬ様子で平然とコーヒーを口にするみるくさん。
　俺は受け取った本をペラペラとめくってみた。表紙に書かれているとおり、ただの都市部の地図でしかない。
　なぜこのようなものをみるくさんは俺に？　あっ、そうか。ビラ作戦が失敗した今、この地図を使ってハルヒと一緒に宇宙人のいそうな場所を探せということか。さすがみるくさん、気が利くぜ。
　だが次にみるくさんが発した言葉は、意外なものだった。
「赤印をつけた場所で待つ。明日午後八時」
「えっ、赤印？」
　聞き返す俺。何も言わないみるくさん。答えを与えてくれるのは、俺が今手にしているこの本だけか。
　俺は注意深く、一枚一枚ページをめくってみた。するとあるページの端が小さく折られているのに気づいた。ん、ここか？　そのページを注意深く見てみる。すると、

　南町第四倉庫。

　赤い印は、そう書かれた文字の上にあった。
「明日の午後八時、ここに来いと？」
　無言でうなずくみるくさん。
「なぜ？」
　話したいことがあるならここで言えばいいじゃないか。明日は休日。それに待ち合わせ場所が倉庫とは……？
「事態は予断を許さない。あなたが来ることを切に望む」

　早口にそれだけ言って、カップを傾けるみるくさん。それ以上話す気はないと言うことか。
　だが俺の疑問はまだ解決しちゃいない。俺が口を開こうとすると、みるくさんは口に指を当てた。珍しく、みるくさんの眼差しは真剣そのものだ。
　耳を澄ましてみると、足音が近づいてくるのが聞こえた。ハルヒか？
　ドアの前で足音は止まった。勢いよくドアが開くと、そこには息を切らしたハルヒがいた。その目は赤く、頬には涙の流れたあとがあった。
「ハルヒ、どうし――」
　立ち上がり、言いかける俺。だがハルヒは俺の言葉を遮った。
「ビラが破られてる。全部」
　ハルヒは部屋に入ってくると、
「帰るわ」
　自分の鞄をひっつかむと、踵を返した。
「待て」
　ハルヒは俺の言葉に振り返ることなく、部室を出て行った。
　鞄をつかみ、ハルヒの後を追おうとする俺。だが俺はドアの前に来たところで、忘れ物に気づいた。
　みるくさんからもらった精密地図。俺はテーブルの上にあったそれを鞄に放り込むと、ハルヒの後を追った。
　ハルヒの足は速いもので、俺が部室を出たときには、ハルヒは廊下のずっと先にいた。そして俺が追いつく間もなく、階段へと姿を消した。
　全力で後を追う俺。必死で階段を駆け下り、中庭に出たときには、前方にハルヒの後ろ姿が見えた。だがその姿も、下校途中の生徒たちに紛れ、すぐに見えなくなってしまった。複数ある校門のうちハルヒがどこから帰るかわからない以上、これ以上追うのは不可能だった。
　俺はしかたなく、独り帰路につくことにした。ゲート下に来たとき、昼間にハルヒがビラを貼りつけた掲示板が目に入った。ハルヒの貼ったビラはすべてはぎ取られ、地面には無惨に破れたルーズリーフの残骸が散らばっていた。
　ハルヒが悲しむのも無理ないか。規定のサイズを超過していた団体の上に貼ったのはともかく、空いていたところに貼っていたのもすべて剥がされるとは。
　俺は残骸を回収してゴミ箱に捨ててから、家路についた。

　帰宅した俺は、ハルヒに電話をかけてみた。だがつながらない。時間をおいてかけ直してみるも、一向につながる気配はない。悲しみで電話に出るどころではないのか？
　途方に暮れた俺はベッドに横たわった。やはり自分が真剣に作ったビラを破り捨てられたら悲しいだろう。あんな内容のビラを出すと言い出したときにとめておくべきだったか。あれほどハルヒを悲しませるくらいなら、実力を行使してでもやめさせておくべきだった。
　だが起きてしまったことは取り消せない。今俺にできるのは、ハルヒをなぐさめてやることだけだ。だが明日は休日。その翌日も臨時休校日。電話がつながらないなら、ハルヒの家を知らない俺に、すぐハルヒに会う手段はない。
　どうすればいい？
　あれこれ考える俺の頭に、一つの案が浮かんだ。俺はベッドから飛び起き、通学鞄を開けた。そしてみるくさんから受け取った地図を取り出した。
「事態は予断を許さない。あなたが来ることを切に望む」

みるくさんの言葉が頭を過ぎる。あのときのみるくさんがハルヒを気にしていたように、みるくさんが明日会いたいというのは、ハルヒに関係することなのかもしれない。

みるくさんの意図が何なのか、俺にはわからない。だが今の俺にできることは、明日みるくさんに会うことだけだ。そう思った俺は、地図で待ち合わせ場所を確認したあと、明日に備えて早めに眠りについた。

午後八時十分前、俺は隣町の港にいた。辺りは静まりかえっており、吹きつける風は冷たい。
時間が時間のせいか。猫の子一匹見あたらない。俺は暗闇の中、遠くに見える町の明かりを頼りに、みるくさんに指定された倉庫の近くにやってきた。
海に面した大きな倉庫。その前に、コートのフードを目深にかぶったみるくさんが立っていた。コートの色は黒く、闇にとけ込んでいるように見える。俺がみるくさんに会う目的なくここを通りかかっていたら、きっとその存在にさえ気づかなかっただろう。
俺の姿を確認したみるくさんは、声をかけることも、手を振ることもせず、ただ俺が歩いてくるのを待っていた。俺がみるくさんから一メートルほどの距離に近づいたとき、みるくさんはくるりと半回転すると、手にしていた鍵で倉庫のシャッターを開けようとした。
倉庫を見上げる俺。倉庫は十階建てくらいのビルに匹敵する高さだ。港に存在していることからして、おそらく貿易か何かの目的に供されているのだろう。なぜみるくさんにそんな倉庫を利用する権限があるのか、俺にはわからない。
ガラガラという大きな音がして、シャッターが開き始める。みるくさんの華奢な身体ではシャッターを開けるのに苦労していたようなので、俺もシャッターを押し上げてやった。シャッターが半分ほど開いたところで、俺とみるくさんは身を屈めて中に入った。
真っ暗な倉庫の中。みるくさんはくるりと半回転すると、シャッターを閉め始めた。
おいおい。ただでさえ暗いのに、ますます暗くなるだろ。
そうは思ったものの、がんばってシャッターを閉めようとしているみるくさんを見ていると、手伝わざるを得ない気持ちになってきた。俺はみるくさんを手伝って、シャッターを閉めた。
あらためて振り返った室内は何も見えず、水を打ったような静けさが支配していた。こんなところに連れてきて、一体何をしようって言うんだ、みるくさんよ？　俺がそう思っていると、
「こっち」
みるくさんのものと思われる手が俺の手をつかんだ。暗がりの中、みるくさんの細い手に連れられ、階段を上る。二十段近くある階段を上ったあと、前方にいたみるくさんがドアを開けたような音が聞こえた。そしてそのまま手を引かれ、室内に入ったような感じがすると、みるくさんの手が離れた。
しまった。置き去りにする気か。
そう思ったのも束の間、パチパチというスイッチの音がしたかと思うと、辺りがぱっと照らされた。
そこは部室と同じくらいの部屋だった。窓はないものの、中央にはテーブルが一つ、壁際に湯飲み茶碗などが置枯れている点も部室に似ていた。きょろきょろと室内を見回している俺に、みるくさんが椅子を指差した。
「どうぞ」
言われたとおり、着席する俺。みるくさんは壁際の茶道具でお茶を淹れ始めた。
やがて湯飲みを乗せた盆を持ってテーブルのところに来たみるくさんは、俺の向かいに着席した。そして湯飲みをそれぞれの前に置いた。
「どうぞ」
「どうも」
いつも部室でそうしているように、平然と湯飲みを傾けるみるくさん。こんなところに連れてこられ動揺している俺とは対照的に、みるくさんは落ち着き払った様子だ。
一学生であるみるくさんがこれほど大きな倉庫を所有しているとは考えにくい。鍵を持っていたということは不正侵入ではなさそうだが、利用する許可を得ているのか？　だが俺との会談に、なぜこんな場所を？

　湯飲みを置くと、口火を切ることもなく、ただ俺を見つめるみるくさん。みるくさんの黒く大きな瞳に、自分が映る。みるくさんを見つめる俺と、黙って俺を見返すみるくさん。その状態が一分ほど続いた。
　ん？　何も言わないところからして、俺から切り出せということか？　いや、違う。よく見ると、みるくさんの視線は俺ではなく、俺の湯飲みにそそがれていることに気づいた。――茶を飲めということか。
　俺は飲み、湯飲みを置いた。その瞬間、まるでそれがみるくさんに話をさせるためのスイッチであったかのように、みるくさんが口を開いた。
「今日あなたを呼んだのは他でもない、ハルヒについて話すため。ハルヒの勢力圏から逃れるため、このような場所に来る必要があった」まるで機械のような、抑揚のない口調で話すみるくさん。
「勢力圏とは……？」
　みるくさんは黙って懐から小さな何かを取り出すと、俺のすぐ前に置いた。
　方位磁針だった。赤く塗られた針の先端が小刻みに揺れている。やがて振れ幅は縮まっていき、ちょうどみるくさんを差すように止まった。それを確認すると、みるくさんは方位磁針を今度はテーブルの端に置いた。やがて止まった針は、またみるくさんの方を向いていた。
　おかしいな。方位磁針っていうのは、どこに置こうと常に一定の方角を向くようにできているはずだ。
「ここの磁場の乱れは異常」
　方位磁針を回収するみるくさん。
「どういうことだ？」
「この倉庫は、以前米軍が利用していたものを買い上げたもの。当時は水揚げされた物資を一時的に保管しておくために使われていたという。武器等は保管されていなかったとされているが、曲がりなりにも軍事施設。強固に造られている。外壁に使われている金属の一部が磁気を帯びているため、先の結果が生じたと思われる」
　ふーん。だが、それがなんだって言うんだ？
「ここでは外部との通信はほぼ不可能。一定の閉ざされた空間と言っても過言ではない。したがって、ここでの会話が村上ハルヒに了知される可能性はきわめて低いと考えられる」
「何だって？」
　思わず聞き返す俺。
　もし内緒で話をしたいなら、ハルヒのいないときに部室で話せばいいはずだ。ハルヒが地獄耳だからそれでは不安というのなら、休日の今日、学校の近辺で落ち合えばよかったじゃないか。いずれにせよ、わざわざハルヒから逃れるために隣町までやって来る必要はないはずだ。
「あなたはまだ気づいていないかもしれないが、ハルヒも私もあなたも、普通の人間ではない」
　ちょっと待った。ハルヒやみるくさんが普通の人間でないというのはそれほど理解に難くない。ハルヒほど破天荒で支離滅裂な人間はそれほどいないだろうし、みるくさんのように寡黙で大人しい人も少ないかもしれない。
　だが俺は特に変わった人間ではないだろう。ハルヒのように宇宙人を捜しているわけでもなければ、電話帳を精読するのが趣味というわけでもない。子供のころから普通に生き、これからも普通に生きていくことを願っているごく普通の人間だ。無論、サンタクロースが実在するとも信じていない。
　怪訝そうな顔をする俺の心を見透かしたのか、みるくさんが言った。
「確かにあなたは普通。そしてその点こそ、特異」
　何が何だかわからない。そもそもみるくさんの説明はだいぶ言葉足らずだ。もう少しわかりやすく説明してくれ。
「この国の治安を守る警視庁公安部と法務省公安調査庁によって共同開発された情報収集用ヒューマン・イ

ンテリジェンス装置。それが、私」
「はい？」
　二の句が継げない。そんな自己紹介は初めて聞いた。ある意味、入学初日のハルヒを上回るレベルだ。こいつこそ宇宙人に匹敵する変わった人間として、ハルヒに紹介すべきか？
　唖然とした顔の俺に、みるくさんが続けた。
「要するに、作り物」
　作り物？　ロボットみたいなものだろうか？
「ちょっと失礼」
　俺はみるくさんの手をとった。みるくさんの手は柔らかく、暖かい。これが血の通った人の手以外の何物でもあるはずがない。
　怪訝そうな顔をする俺に、みるくさんが言った。
「信じて」
　じっと俺を見つめるみるくさんの瞳は真剣そのものだ。
「わるい」
　俺は手を放した。
　何が正しいのか、俺にはわからない。だがみるくさんの真摯な瞳は、決して冗談を言っているようには思えない。
　みるくさんは首を振り、
「いい」
　とだけ言った。そして、
「ハルヒは神」
　俺は耳を疑った。ハルヒは神？　いや、紙か？　……いずれにしろおかしいだろ。
「人は God とも Allah ともいう。それが、ハルヒ」
　みるくさんの真剣さを持ってしても、その発言は受け入られない。常識的に考えて、ハルヒが神であるはずがない。
　俺は首を振った。
「それはあり得ない」
　毅然とした目つきで、みるくさんを見返す。
　俺の目線を受け止めたみるくさんは、
「やはり」
　小さくうなずいた。
　ん？　自分で言い出しておいて、ハルヒが神でないと認めるのか？
「今のは独り言」みるくさんは首を振った。「やはりあなたはハルヒが神ということを受け入れられない。あなたの本質は普通」
　俺が普通？　いや、別に俺でなくともハルヒが神であるということは受け入れられないと思うけどな。
「あなたが信じたくなければ、それでいい。むしろ理論的にも構図的にも、あなたには信じられないはずだ。だけど私は、ハルヒが神という前提で話を進める」
　勝手にしてくれ。
「私のような存在が創造され得たのは、ハルヒが神だから。現代ではいかなる技術をもってしても、これほどまでに精巧な装置を作ることは不可能」
　そうかい。

「私の役目はハルヒが暴走しないよう、見張ること」
　ちょっと待った。たとえ冗談であるにせよ、その発言には引っかかるところがある。
「おいおい。ハルヒが神なら、何で自身を監視するようなものの存在を許すんだよ。自分にとって不都合じゃないか」
　笑う俺。
　だがみるくさんは表情一つ変えることなく、
「現在のハルヒは自身が神であることに気づいていない。私が存在していられるのは、ハルヒが無意識に私の存在を望んだから」
「ならさっさとその神様とやらに言ってやったらどうだ？　私はあなたに望まれて参上しましたって。ハルヒのやつ、きっと喜ぶぞ」
　昨日の悲しみはどこに行ったのか。目をランランと輝かせ、みるくさんにあれこれ質問を投げかけるハルヒの姿が目に浮かぶ。
　みるくさんは首を振った。
「ハルヒに自身が神であることを教えてはいけない。もしそのようなことが起これば、地球は滅ぶ」
　真顔で言うみるくさんに、俺は笑いを堪えきれなかった。腹を抱えて笑う俺に、みるくさんが続けた。
「いえ、滅ぶという言葉は不適切。ハルヒの望む形に生まれ変わるとという方が適切」
　そうかい。どちらでもよいがね。
「問題は、ハルヒが今の世界におもしろみを感じていないということ。ハルヒはこの宇宙を作り、天地を創造した造物主。必要あらば、今の世界を破壊し、新たな世界に作り替える可能性が高い」
　ハルヒがこの世界を造っただと？　それは冗談にしては面白すぎる。
「はは、みるくさん。面白すぎ」
　腹を抱えて笑う俺。そんな俺をみるくさんはしばらく黙って見つめたあと、
「冗談ではない。世界は既に滅び始めている。昨日の午後、隣町のビルが倒壊した」
　ああ、昨日の夕刊にそんなニュースが載っていたな。そのときは疲れていたから特に気にも留めなかったが、今思えば一大事だ。去年完成したばかりの高層ビルなのに、ガス爆発で全壊。周辺住民を含め、死者千人を超えるとみられる大惨事だそうだ。
「倒壊が起こったとされる時刻は四時二〇分。ハルヒが掲示板の確認に席を立ったのが四時一五分」
「なっ…」
　まさかハルヒがビルを壊したとでも言うのか。たしかに時間だけならおよそ一致していなくもないが、濡れ衣もいいとこだ。どう考えてもあり得ない。
「ビラを破られたことに憤慨したハルヒが、無意識のうちに破壊したとみられる」
　何が「みられる」だ。理由になってないじゃないか。俺は机に手をつき、立ち上がった。
　俺はみるくさんの冗談を聞きに来たんじゃない。俺はハルヒといち早く連絡をとり、なぐさめてやる方法を探しに来たんだ。みるくさんに頼ろうとした俺が間違っていた。
　黙って俺を見上げるみるくさんに、俺が言った。
「もういいですよ」
　ドアを開けると、そこには暗闇が広がっていた。部屋から漏れ出る光りで階段の存在が認められるものの、下の方は闇に包まれていた。独りで歩けば踏み外す可能性があることはもとより、倉庫の出入り口にたどり着く方法さえわからない。俺はそれ以上、足を踏み出すことができずにいた。するとみるくさんが近づいてきて、
「帰る？」

　その瞳は心なしかいつもより不安げだった。
　訊き方からして、いいえと答えればまだ話を続けるのだろう。だがこれ以上みるくさんと話をしても得られるものはない。
　俺は黙って頷いた。
　みるくさんは懐から紙切れを取り出すと、俺に手渡した。見ると、点描画のような字で携帯の電話番号が書かれていた。
「困ったら連絡して」
　いや、困ったときに「ハルヒは神」とか言ってるみるくさんに相談しても何にもならないだろう。みるくさんは独りでハルヒを神とする新興宗教でも始めるといい。
　くしゃりと紙切れを丸め、ポケットに突っ込む俺。小泉はまだみるくさんの番号を聞いていなかったようだし、今度あげれば喜ばれるかもしれん。
　俺が紙切れをポケットに入れたのを確認すると、みるくさんは俺の手をつかんだ。そして来たときと同じように、黙って俺の手を引いて倉庫の外に出た。
　外は相変わらず暗かった。蒼白い月明かりが、白いみるくさんの肌をさらに白くしていた。みるくさんは俺に、
「いつまでもハルヒの側にいて」
　とだけ言い残すと、俺が来たのとは反対の方向に歩き始めた。そしてその背中は闇に紛れ、見えなくなってしまった。
「はあ」
　溜息をつく俺。いったい何なんだよ。隣町まで呼びつけておいて冗談だけ言って帰って行くとは。
　俺は踵を返し、家路についた。

翌々日はハルヒと別れてから初めての登校日だった。昼休みになっても、ハルヒは姿を現さなかった。
隣を見れば空席。これまで一限から四限までの授業を受けたが、どれも頭に入らなかった。俺は心にぽっかりと穴が空いたように、誰も座っていない空席を見つめながら、独り学食で買ったパンをかじっていた。
ハルヒにとってはこの前のことがそれほどショックだったのだろうか。ハルヒに文句を言われても、力ずくでとめておくべきではなかったのか。後悔の念が過ぎる。
ハルヒが電話に出ない以上、ハルヒが登校してこない限り俺にはハルヒと会う手段がない。だがもし、このままハルヒが来なくなってしまったら――
途方に暮れていると、俺の肩を叩く者があった。
「どうしたチョン？　なに意気消沈してんだよ」
顔を上げてみると、小泉だった。いつになくにやにやしているようなのは気のせいか。
「ハルヒが来ないんだ」
小泉は声を上げて笑うと、
「そりゃ当然さ。あれだけ恥をかけば来られないだろ」
「ん？　お前、何か知ってるのか？」
「なんだ、お前は知らないのか。ネコネコ動画って知ってるか？」
「ああ、知ってるよ」
ネコネコ動画というのは会員制の動画投稿サイトだ。数年前にできたらしいが、最近急成長し、うちの学校の利用者も少なくないという。
「あそこにハルヒが真顔で変なビラを貼ってる動画がアップロードされたんだ。そしてそのビラの内容がこれ」
携帯電話を差し出す小泉。画面には、ハルヒの作ったあのビラが映し出されていた。
「過去にもネコ動にうちの生徒の不祥事がアップロードされたことはあったらしいが、こいつはおそらく過去最高だな。あれで村上フォンドのお嬢様だって言うんだから、お笑いだよな。ははは」
腹を抱えて笑う小泉。いくらハルヒが小泉にとってライバルグループの跡継ぎとはいえ、あまり笑ってほしくはない。
俺は小泉の脇腹を小突いた。
「なあ小泉よ」
「はは。何だよ？」
笑いを堪えながら、小泉が言った。
「ハルヒの連絡先知らないか？　携帯以外の」
「まさか」
首を振る小泉。そうだよな。小泉はハルヒをナンパしようとしてふられたんだ。そこまで知っているはずがない。
「せめて家さえわかればな……」
呟く俺。
「はっ。あいつの家に行ってどうするんだよ？　まさかビラをもう一度貼りましょうとでも言うのか？」吹き出す小泉。「おいおい冗談はやめろ。俺は中学のころ、俺に次ぐ優秀な人物としてお前を少しは尊敬してやっていたんだぜ。それがなんだ？　ハルヒなんかに心を奪われるとは。お前も落ちたもんだ。はは」
いや、入学早々ハルヒに声をかけ、さらには「ハルヒちゃん」などと呼んでいた小泉に言われたくはない。
俺は首を振った。
「別にハルヒのやってることを応援するわけじゃない。俺にできるのはなぐさめてやること。そしてハルヒ

が正し道を歩けるよう、見守ってやることくらいだ」
「はは。そりゃ無理だな。ハルヒの家は敷地の壁が有刺鉄線で囲われた大豪邸だ。ハルヒが会うって言わない限り、中に入れないぜ」
　ちょっと待った。今何て？
　俺が問いただす間もなく、小泉は口を滑らせたとばかりに口に手を当てていた。
　俺は小泉を見据えて言った。
「小泉。お前、ハルヒの家を知ってるよな？」
　理由はわからない。
　だが小泉は何も言わずに踵を返すと、立ち去ろうとした。俺は小泉の腕をつかんだ。
「待てよ。俺たちは小学校時代からのつき合いだ。困ったときはいつも助け合ってきたじゃないか」
「ああそうだ。だが、だからといって今後も助け合うとは言ってないぜ」
　去っていこうとする小泉。
「そうか。小泉」俺は小泉の腕を放した。「俺たちの友情も終わりだ。天下の小泉グループ総裁の跡継ぎであるお前が、実はこの高校に補欠の最下位で合格していることはウィキリークスに流しておくよ」
　血相を変え、振り返る小泉。
「ちょっと待て。それは言わない約束だろ」
「いや、そんな約束知らないな」
　首を振る俺。
　小泉は俺の手をとった。
「おい待て。かの小泉グループ総裁の息子が、実は父親の圧力でぎりぎり押し込んでもらったなんて情報が流れてみろ。グループも俺もただではすまないぞ」
　頭を下げる小泉。その姿勢には真摯さと言うよりも、切迫さが感じられた。
「わかった。リークしないから、ハルヒの家まで案内してくれ」
「ちょっと待ってろ」
　小泉は携帯電話を取り出し、ボタンを押しながら教室の外に出て行ってしまった。そして俺がパンを食べ終わったころ、鞄を片手に戻ってきた。
「行くぞチョン」
　来い、と手招きする小泉。
「ちょっと待て。もう行くのか？」
　残りの授業はどうする気だ？　まだ五・六限が残ってるぞ。
「善は急げだ。さっさと約束を履行しないと、お前にリークされてしまいそうで怖い」
　なるほど。俺は鞄を持って立ち上がった。
　小泉が続ける。
「校門の前に車を呼んだ。早く行こう」
　車で行くほど遠いのか。だが車を出してくれるとはありがたい。小泉の家は学校のすぐ近くにあるから、すぐに来てくれるだろう。

　小泉とともに校舎を出た俺は、その光景に驚いた。校門の前、全長十メートルはあると思われる黒塗りのリムジンが停車していた。その圧倒的な存在感を前に、早くも好奇心旺盛な生徒たちが集まってきていた。
　さっきの脅しは効果がありすぎたのか。小泉とは長いつき合いだが、こんな車を見たのは初めてだった。
　人混みをかき分けてリムジンの後部に近づくと、スーツに身を包んだ女性が降りてきた。整った目鼻立

ちに、凛とした立ち姿。
　小泉は俺を指差して、「客人を連れていく」と告げると、車に乗り込んだ。後に続く俺。
　中は電車のように、長い座席が向かい合うように配置されていた。俺が中程へと進むと、先ほどの女性が乗り込んできてドアを閉めた。そして車内電話で発進するよう伝えた。
　ゆっくりと動き出すリムジン。みるみる遠ざかっていく生徒たち。
　俺は足を組んで座っている小泉に、言った。
「こいつはすごいな」
「ハルヒの家は郊外だ。二時間の長丁場だからこれくらいは必要だろ。ところで何か飲むか？　ワインあるぞ。七十年ものの」
「いや結構」
　首を振る俺。これからハルヒをなぐさめに行こうというのに、ここで酔っぱらっていることなどできない。
「じゃあ水飲むか？　硬水と軟水があるぞ」
　選べるのかよ……
「じゃあ硬水で」
　小泉は俺たちから少し離れたところに座っていた女性を向き、
「千鶴、ワインと軟水」
「かしこまりました」
　千鶴と呼ばれた女性は備え付けの冷蔵庫から取り出した二本のボトルの中身をグラスに次ぎ、俺と小泉に順に手渡した。
　グラスを傾ける俺。硬水特有のきつい食感が口に広がる。グラスを空にしてから、ゆっくりとワインをたしなんでいる小泉に耳打ちした。
「――というか、あの人誰？」
　車の後部、凛とした姿勢で待機している女性を指差す。
「女中だ。俺つきの」
　小学生のころ小泉の屋敷に遊びに行ったときから小泉邸には複数の女中がいるのは知っていたが、彼女を見たのは初めてだった。
「遠出するときはいつも連れて行くんだ。ああ見えて空手三段だから、いざというときボディーガードになるかもな」
　女中を見る俺。その華奢な外見からは、到底高度な格闘技術をみにつけているようには思えない。
「かわいいな」
　小泉に耳打ちする。
「俺の好みに合わなければ採らないからな」
　なるほど。
「給料はどれくらい払ってるんだ？」
　村上フォンドと双璧をなす、天下の小泉グループ本家に仕える女中。それも次期総裁つきだ。きっと目が飛び出るほどの高給をとっているに違いない。よかったら俺も働かせてくれ。
　小泉が言った。
「別に」
　ん？　言いたくないとは意外だ。小泉は子供のころ、よく高級時計を買ったとか言って自慢してきたものだが……

「別に？」
　訊き返す俺。
　小泉が言った。
「別に給与らしきものは払っていない。彼女は働く限り衣食住が保障されるだけだ」
「それって労働基準法に違反してないか？」
　少なくとも最低賃金は支払わないといけないはずだ。
　小泉はワイングラスを傾けてから、
「その質問は意味をなさないな。こう堂々と未成年飲酒規制法を犯している俺が、法を守らないことくらい知っているだろ」
　たしかにそうだ。子供のころから、小泉は普通の道を歩くより、近道や裏道を探す方が好きなやつだった。また小泉グループにも昔から多額の脱税を行っていたり、官界・政界に賄賂を送っていたりするとの噂が絶えない。
「だがチョンよ。たとえ金銭という給与は出なくとも、うちで働きたいやつは山ほどいる。仕事は楽ではないだろうが、まじめに働く限り衣食住が保障される点、非正規雇用者よりずっとましだ。俺は彼女に悪いことをしていると思ってはいない。こんな時代でありながら、彼女に生活の安定を提供しているんだからな」
　ワインを飲み終えた小泉は、グラスを女中に返した。
　俺たちの会話を聞いていたのか、女中が口を開いた。
「そうです。純一様は高校卒業後、内定一つもらえなかった私を救ってくださった命の恩人です。もし純一様がいらっしゃらなければ、私は浮浪者になるか、死を選ばざるを得なかったでしょう」
「よしよし。千鶴はいい子だな」
　女中の頭をなでる小泉。
　だが政界に圧力をかけて製造業への労働派遣を解禁させ、労働環境を悪化させたとされているのは、傘下に多数の製造業を抱える小泉グループではなかったか。
　そう思ったものの、ハルヒのところに連れて行ってくれる小泉にそのことを指摘するのはためらわれた。しかたなく俺は話題を変えることにした。